

タスマニアでの1週間

竹内 淳彦

昨年の夏、IGUのコミッション・ミーティングがタスマニア島で開催された。当初、会議はシドニー近郊が予告されていたが、2ヶ月程前になって急遽変更になったものである。ペンギンも住むという南の島への変更を喜んだのは私だけではあるまい。ところで、オーストラリア人が多数参加する会の最大の問題は言葉である。私はもともと外国語音痴の上に、かつてオーストラリア訛に大変悩まされたことがある。しかも、日本からの発表者も参加者も1人だけだという。そこで、あちらの訛に馴れるためという名目で事前に約1週間、オークランド、キャンベラ、メルボルンと1人旅を楽しむことにした。旅は1人が1番である。私は今回も、おもな都市で日本人参加者のいそもないツアーを選んで参加することにした。出発する都市から500キロも離れた場所に置きざりにされたら大変であるから、私は何時も最前列に陣取り、運転手兼ガイドの語に耳を傾けるように努めた。その甲斐あって、夜一緒に飲みに行く程親しくなった運転手もいる。

8月13日、メルボルンからタスマニア第2の都市ラウンセストンに向う。機内に入り、まだシートベルトも締めないうちに「竹内教授ですか」と後から声を掛けられた。ボン大学のグラーツ教授である。ドイツの友人から聞いてきた私の人相と似ているので声を掛けたという。すっかり親しくなったことはいまでもない。飛行機の所要時間は約40分、空港にはオーガナイザーのウィルデ博士が迎えに来ていた。海上は空港から内陸に1時間程入ったルザグレンというリゾート村である。村は野生動物も住む広大な公園に囲まれ、庭付きの40程の独立建物と、いくつかのペンション風の建物からなり、宿舎群の中心にはレストラン、マーケット、体育施設が位置している。私が滞在したのはもちろん2軒1棟のレンガ造りの独立建物で、6坪程の居間兼台所、寝室、洗濯室、それにバスルームから成るゆったりしたものであった。その寝室で夜は電気毛布の温もりで眠り、朝は散歩する孔雀の鳴声で目覚

める1週間であった。

会議は14日から、IGU会長のスコット教授のスピーチを皮切りに6日間、巡検を交えて行われた。参加者は17ヶ国から約60人で、夕食後も特定の問題にしぼって議論するのであるからまさにハードスケジュールであった。3日目に行われた私の発表は、国、地方自治体の政策と企業行動との対立、関わりと日本の工業地域システムの変化に関するものであった。発表後の討論を通じて痛感したことは、日本の工業に対する参加者の関心の高さであった。座長は旧友でスウォンジー大学のハンフリー教授であり心強かったが、時間一杯、さまざまな質問に冷汗をかき通してであった。その余波は、コーヒブレイクはもちろん、夕食後にまで及び、スウェーデン政府の要人であるニールセン博士からは私のペーパーをスウェーデン語に訳させて欲しいとの申し出があった。3月の完成とのことであった。日本に関しての質問や非難の矢はアメリカをはじめ多数の発表に関係して私のところに降りかかってくるので会議中はまさに緊張の連続であった。

会議期間中、巡検やパーティーを通じ、旧知の仲間はもちろん、各国の研究者と親交を深めることができた。夜は私の広い居間に朴（韓国）。李（中国）両教授や、北欧の仲間達が集まり、日本から持参のウィスキーを飲み、せんべいをかじりながら語りあった。そのほとんどの仲間からはクリスマスカードが届いた。会は8月20日に終了し、私は多くの仲間達とシドニーに向った。

いま、私は発表内容を中心に、ロンドンから出版される本の原稿を書いている。仕事に疲れ、書斎からベランダに出ると、冬の空は満天の星である。ラウンセストンの友人宅を訪ねた折、森の中で仰いだのはどの星であろうか。私に南十字星を教えてくれた親切なたスマニアの友人達は、いま南の夏空にどんな星を眺めているであろうか。

（日本工業大学）